

FOCUS UP (今月の表紙)

ママになった小沼姫が「一から出直し」のトーナメント復帰!



▲おぬま・ひめ / 1998年3月31日生まれ、神奈川県川崎市出身。150センチ、右(両手)投げ。血液型A。2019年プロ入り(52期/ライセンスNo.580)。川崎グランドボウル所属

両手投げの小沼姫(52期)が、今年度の下半期出場優先順位決定戦から3年ぶりにトーナメント復帰を果たす。休業中に女子でも両手投げの選手は珍しい存在ではなくなってきたが、「女子プロ第1号」の名にかけて「恥ずかしい姿は見せられない」と、密かに闘志を燃やしている。(PHOTO: 福地和男)

☆

小沼はデビューの翌2020年に「ボウリングとは一切関係ない」一般男性と入籍。一児を授かり、丸2年間休業して子育てに専念していた。

「お休みしている間、育児は楽しくやっていたのですが、やっぱりボウリン

グのことが頭のどこかにあって『投げたい』『お客さんに会いたい』という思いが常によぎっていました。だから今、ここ(川崎グランドボウル)で働いているのがすごく楽しいし、気持ちのリフレッシュにもなっています」

ボウリングを始めたのは遅く、高校1年のとき。

「通学路に川崎グランドボウルがあって、下校途中に練習中のボウリング部の人から『いま仮入部やっています。タダで投げられますよ』と声をかけられたのがきっかけです。中に入ったら顧問の先生に『女子部員が必要なんだ』と言われて、無理やり入部させられました(笑)」

当時のボウリング部では、指導に來ていたプロのコーチが男女を問わず初心者の1年生全員に両手投げを課したという。

「試合で他校に勝つためには、ボールの曲がりを覚えなくてははいけない。両手投げなら簡単にボールを曲げられる」というのがコーチの考えでした」

実際、曲がるボールの習得は早く、試合でも上位に入賞することが徐々に増えていった。他校に女子の両手投げはおらず、変な目で見られることも多かったが「それで余計に燃えた部分もあって、どんどんボウリングに熱中していった」そうだ。

卒業後は正スタッフとして川崎グランドボウルに勤務。プロを目指したのは「当時のコーチから『両手投げの女子プロはひとりもない』と聞いて、だったら自分が第1号になりたいという気持ちがわいてきた」から。プロテストには17年から挑戦し、「これが最後と決めて臨んだ」3度目の受験で、晴れて合格を勝ちとった。



▲「ライバルでありよき仲間」という横山実美(左)と川崎グランドボウルのマスコット“ぐーちゃん”を挟んで。新人戦での「両手投げ競演」が楽しめた

“両手投げ第2号”は同級生

今年度のプロテストでは、両手投げの“女子プロ第2号”が誕生した。合格者の横山実美は、小学校4年時からずっと同じ道を歩んできた小沼の同級生だ。

「実美とは小学校5年生のときに、自分の父親が監督をやっている地域のドッジボールクラブに誘ったのがきっかけで仲よくなりました。中学時代はソフトボール部と一緒に三遊間を守っていたし、実をいうと高校でボウリング部に誘われたときも一緒に(笑)」

川崎グランドボウルにも同時に入社

したが、すぐにプロを志向した小沼に対して、横山はJBCでしばし競技経験を積む道を選択し、今回がプロテスト初挑戦での合格だった。

「周囲の人はやっぱり『どっちが上手いか』という目で見ると思うので、実美のプロ入りはプレッシャーになっています(苦笑)。でも、ボウリングはほとんどが自分との闘い。彼女はこの2年で経験値を上げたと思うけど、それだけにも勝てたときはよりうれしいだろうし、燃えるものがありますね」

もちろん、復帰してすぐに好成績を挙げられるほど甘い世界ではないことは百も承知だ。

「デビューして半年ちょっとで休業してしまったので、自分のなかでは“一から出直し”という気持ちです。順位戦の結果次第ですが、出場できる大会には極力出たいし、自分が受け持っているリーグでもできるだけ投げとお客さんと交流したい。そして多くの人に応援してもらえるプロになりたいと思っています」

子育てとセンター勤務で練習時間の確保もままならないが、当面の目標はあえて「新人戦で優勝すること」に定めている。

「自分はあと2回しかチャンスがないので(苦笑)。今年は順位戦のすぐ後に開催されるから、ある程度体も動いて、気持ちを切らさずに臨めると思います。実美に負けられないように頑張ります」

(取材協力: 川崎グランドボウル)



グリコセブンティーンアイス杯 第9回プロアマボウリングトーナメント

5月28・29日 / 広電ボウル



▲来年には50歳を迎える太田「25年目の初優勝は長かったですね。男子は9月まで試合がないので、体調管理をしっかりして秋シーズンに臨みたい」



▲新人戦を含め3個目のタイトル獲得の川崎は「2020年の貯金でシードには入れたけど、昨年は不甲斐なかったの、今年はいっぱい優勝したい」

子は川崎由意(48期・アイキョーボウル/サンブリッジ)が松永裕美との10フレ勝負を制して、3勝目を挙げた。(主催: (公社)日本プロボウリング協会、特別協賛: 江崎グリコ(株)/(公社)日本ボウリング場協会)

TV決勝、男子の優勝決定戦は、トップシードの太田と、3位決定戦でベテランの宮崎淳を2フレからの6連発で248:209と退けたアマチュアの山

男子・太田隆昌25年目万感の初タイトル  
女子・川崎由意が松永裕美との激闘を制す

本智哉選手の対戦となった。

半マークリードの太田は、8フレをストライクのあとの9フレ「右レーンがどうしても飛んでくれなかった。大外はオイルがなくて、1枚外に出る勇気はなかったけど、半枚出て気持ちで投げた」と貴重なダブル。10フレ1投目を持ってくれば、自力で優勝を決められるところだったが、「自信のある左レーンだったけど、優勝の2文字がちらついてしまった」と⑦を残す。逆転のチャンスが残された山本選手は「8フレが薄めだったので、ちょっと外に出して角度をつけようと思った」10フレの投球は、厚めで⑥⑩を残す8本カウント。

「他力本願だったけど、勝負の神様はまだ自分の上にいてくれた」と、プロ25年目で太田が歓喜の初優勝を飾った。

女子は、3位決定戦で松永が最後の1投を厚めで③を残す299に崩れ落ちるシーンがあったが、プロ入り後初のTV

決勝進出だった水谷若菜を下して、トップシードの川崎への挑戦権を手にした。

5フレから2つめのダブルを持ってきた松永が、1マークリードして後半勝負へ。ともに再三の⑩ピンタップに苦しんでいたが、川崎は「ジャストポケットでも飛ばないので、8フレはちょっと内に寄ったら、⑤も残りそうな⑦ピン。これはまずいと思って、10フレは逆に外に出て内に向けて投げました。ダボらないと勝ちはないので、ギャンブルでした」と、ファ

ウンダーションを生かす見事なダブル。さらにパンチアウトを決めて、一昨年の大岡産業レディース以来の3勝目を挙げた。



▲素手にしてまだ優勝の味はよくわかっていない松永「周りからはよく言われているけど、自分ではまだまだ」



▲優勝にあと一歩だった山本選手「攻めた結果なので悔いはないです」

